

## 〈語り手〉に気づかせるための小学校国語科授業実践

上松柚寿<sup>†</sup> 近藤れいら<sup>†</sup> 奥田浩司<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup>国語教育講座

### Practical Research of Japanese class in elementary school to make students aware of the “Narrator”

Yuzu UEMATSU<sup>†</sup>, Reira KONDO<sup>†</sup> and Koji OKUDA<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup>Department of Japanese Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords : 語り手、国語科、アニメーション

#### I 研究の背景と目的

文学的な文章を読む上で、〈語り手〉を用いることの効果は大きい。なぜなら、文学作品を構造的に捉え、論理的に説明することが可能となるからである。中学校国語科の教科書において、現在は全社<sup>1</sup>〈語り手〉について言及されている。本研究では、〈語り手〉について具体的に学ぶ前の小学校6年生の児童を対象に〈語り手〉を認知させるための実践を検討した。

ここで、〈語り手〉を用いて小学校の児童に文学的な文章を読ませる実践を行った先行研究を確認する。

1つ目に、武田裕司「「語り手」に着目して文学的文章を読むことの意義—小・中学生の「蜘蛛の糸」に対する反応分析を通して—」<sup>2</sup>が挙げられる。ここでは、小学校4年生、6年生、中学校2年生に対して〈語り手〉に着目した読みについての調査が行われている。調査という形式ではあるが、「小学校中学年から高学年にかけてが「物語内容」を捉える段階から「作品の表現や作品構造」に目が向けられるようになる移行期であると言える」とした上で、「行われる解釈に様々なバリエーションが生み出されること、またそれによって文学的文章と自らとを関連付けて読む契機を読者に与えることが「語り手」に着目して読むことのできる意義である」と述べられている。

2つ目に、中山卓・伊藤和人・益子祥直・佐藤多佳子「小学校中学年における「語り」概念の獲得を目指した授業デザイン」<sup>3</sup>が挙げられる。

「ごんぎつね」を演劇化する活動で〈語り手〉について考えさせる授業を小学校4年生に行っている。特に「語り手の位置に自らを置くことによる視点の認知の重要性」に着目し、「寄り添いの度合い（心の距離が近い・心の中に入り込んでいる・超越的な立場であるなど）を判断して表現する」児童の様子が見られたとした。

以上2つの先行研究から、文学的な文章の読み〈語り手〉を用いることには意義があり、児童

生徒が読みを深めるきっかけとなるといえるだろう。

本研究では、小学校6年生が〈語り手〉を認知して文学的な文章を読むためにどのような授業を行うことができるか検討する。しかし、子どもにとって〈語り手〉を認知することは簡単ではない。そこで〈語り手〉を認知しやすくするために、アニメーションを用いる効果や是非について考えたい。ただし、本研究における〈語り手〉の定義については、文学研究における〈語り手〉の概念を参照した。具体的には、ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』<sup>4</sup>の議論を基にした土田知則、青柳悦子、伊藤直哉『現代文学理論』<sup>5</sup>及び諏訪裕『ナラトロジーの理論と実践』<sup>6</sup>を用いた。これらの参考文献は主として、文学研究の領域で用いられているものである。本研究では文学研究における〈語り手〉の概念を援用しつつ、実際の授業で活用した。以下に具体的な流れを示す。

まず〈語り手〉の概念について整理した。そして、小学校6年生に向けた学習指導案を作成した。その後研究授業を実施し、児童の授業中の様子やワークシートの記述を整理した。その上で、小学校6年生の児童がどこまで〈語り手〉を理解して読むことができるのかについて考察した。最後に本研究の成果を総括した。

#### II 〈語り手〉について

本章では、本実践で導入した〈語り手〉の概念について説明する。

1点目は、「全知」の〈語り手〉についてである。諏訪(2007)は、「「全知の」

(omniscient) 語り手による物語言語、トドロフの公式によれば「語り手>作中人物」(語り手は作中人物よりも多くのことを知っていて、どの作中人物が知っていることよりも多くのことを語る)で表される」<sup>7</sup>と述べた。土田・青柳・伊藤(1996)は「物語世界のあらゆる時間・空間に起

<sup>†</sup>大学院生 Graduate Student, Aichi University of Education, kariya 448-8542, Japan

こった出来事、そしてあらゆる登場人物の内面を記述することが可能であるような体制である」<sup>8</sup>と述べている。

2点目は、「内的焦点化」である。土田・青柳・伊藤(1996)は、内的焦点化について「あるテキストが作中人物の視覚を採用して物語世界を喚起するタイプ。これが従来の「視点人物」による物語に相当し、その人物から見た外的世界とその人物の思考や心理が言及されることになる。」<sup>9</sup>と説明する。

本実践では〈語り手〉における以上2点の内容を参照して授業を展開した。

### Ⅲ 教材の選定

本実践では、教材としてアニメーション『ちびまるこちゃん』<sup>10</sup>と「ごんぎつね」<sup>11</sup>を用いた。

『ちびまるこちゃん』については、アニメーションに登場するナレーションが文学作品における「全知」の〈語り手〉の性質を備えていると捉え、授業に取り入れた。また、児童にとって身近な題材を用いることで〈語り手〉に気づくことが容易になると考えた。

児童が授業後も〈語り手〉を意識して物語を読むことができるようにするには、文学的な文章でも〈語り手〉を認識できることが必要とされる。そこで、本実践ではアニメーションで抽象的な概念を身近に感じながら学んだ後に、文学的な文章を用いて〈語り手〉について学ぶことをねらいとした。そこで、文学的な文章として「ごんぎつね」を教材に選んだ。「ごんぎつね」は4年次に学習済みの教材であり、児童は既にその内容を知っている。

加えて、「ごんぎつね」の最終場面の「こないだうなぎをぬすみやがった、あのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。」という記述に着目したい。この場面では、兵十への内的焦点化が起こっている。兵十やごんの行動や様子が書かれた記述とは違い、兵十の心情が語られているのだ。

したがって、児童がすでに内容を知っており、文学作品を分析することの入り口として内的焦点化を扱うことができるという2点から、「ごんぎつね」の使用がふさわしいと考えた。

### Ⅳ 実践の内容

本章では、授業実践の流れについて示し、授業における児童の反応とワークシートの記述について述べる。また、本研究の論旨とは逸れるが、実践の様子を大学にて学生が遠隔で観察できるよう試みた様子を最後に述べた。

本実践は、愛知県の公立小学校6年生の1学級25名を対象に行った。

#### 1. 授業の流れ

本節では、授業の流れについて説明する。次頁に、40分間に行う学習指導案(略案)(資料1)と使用したワークシート(資料2)を掲載した。

まず導入では、アニメ『ちびまるこちゃん』を

用いて〈語り手〉について説明した。『ちびまるこちゃん』には、姿を見せないナレーターが登場する。小学校6年生が語り手を理解するための手立てとして、このナレーターを用いた。そして「ここでのナレーターを、中学校で習う国語における〈語り手〉と呼ぶ」と置き換えて説明した。

〈語り手〉については、「姿は見せないが、主人公まる子や登場人物のことを知っており、語ることができる存在」として児童に紹介した。

次に、「ごんぎつね」の一場面を取り上げ、〈語り手〉によって語られる言葉やその内容について考えさせた。『ちびまるこちゃん』で登場した〈語り手〉のイメージを「ごんぎつね」にも反映させ、文学的な文章にも〈語り手〉の概念を照らし合わせて考えさせた。以下に具体的な活動を述べる。まず、「ごんぎつね」最終場面の本文が書かれたワークシートを配布した。児童には、〈語り手〉の言葉として書かれている文がどこかを考えさせ、該当部分に線を引かせた。全体でどこに線を引いたのか共有した後、普段何気なく読んでいた文学的な文章に、〈語り手〉の言葉がたくさん含まれていると確認した。

ワークシートに線を引いた後は、自分が線を引いた部分をもとに〈語り手〉の特徴について考えさせて整理した。「ごんぎつね」には、「こないだうなぎをぬすみやがった、あのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。」と兵十の心情を語る内的焦点化の記述が登場する。この記述に着目させ、〈語り手〉は登場人物の行動や様子だけでなく、気持ちまで説明することができることを学級全体で確認した。そして、〈語り手〉は何ができるのか、物語内でどのような役割を果たすことができるのかについての考えをワークシートに自由に記述させた。ワークシートに記述した内容を学級全体で共有し、授業のまとめとした。

最後に、学習指導案には含まれていないが、時間に余裕が生まれたため、授業の感想をワークシートに記入させた。

また、実践の様子を大学にて学生がリアルタイムで観察できるよう試みた。撮影用のタブレットを設置し、その様子をMicrosoft teamsで大学と中継した。直接学校現場に足を運ばなくても、授業の様子を観察することができるかどうかを確認した。

資料1 学習指導案（略案）

(1) 目標

- ・ 〈語り手〉を意識して、物語を読むことができる。（知識及び技能）
- ・ 〈語り手〉が語る内容から、その特徴を考えることができる。（思考・判断・表現）

(2) 展開

※実践日が特別時間割日であったため、40分授業となっている。

段階	学習活動	指導上の留意点
導入 10分	<p><b>1 語り手の存在を知る。</b></p> <p>(1) アニメ「ちびまる子ちゃん」を視聴する。 「登場人物は誰がいたかな？」 (誰の声がしたかな?)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まる子</li> <li>・お母さん</li> <li>・美容師さん（二人）</li> <li>・たまちゃん</li> <li>・ナレーター</li> </ul>	<p>○今回は、アニメにおけるナレーターを「語り手」という特別な存在として進めることを伝える。</p> <p>○語り手の存在を認識させ、登場人物とは異なる存在であることを確認する。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">めあて：「語り手」について考えよう。</div>		
展開 15分	<p><b>2 「ごんぎつね」の中の語り手を見つける。</b></p> <p>(1) 全体で語り手の文章を一部確認する。</p> <p>(2) 個人で語り手の言葉だと思えるものに線を引く。</p> <p>(3) どこに線を引いたか全体で確認する。</p>	<p>○アニメだけではなく、物語にも語り手がいることを確認する。</p> <p>○スクリーンで映しながら、語り手の言葉を一部例示する。</p>
15分	<p><b>3 語り手の特徴について考える。</b></p> <p>(1) 6場面5行目「こないだ～しに来たな。」から、語り手が兵十の気持ちを語っていることに気付く。</p> <p>(2) 語り手ができることは何か考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お話を進める</li> <li>・気持ちを説明する</li> </ul> <p>(3) 考えた内容を全体で共有し、振り返る。</p>	<p>○語り手が場面の説明だけでなく、登場人物の気持ちも語っていることを確認する。</p> <p>○冒頭で示した「特別な存在」としての語り手について考えさせる。</p> <p>○本授業の中での子どもの気づきを全体に共有して、振り返りとする。</p>
まとめ		

(3) 評価

- ・ 〈語り手〉を意識して、物語を読んでいる。（知識及び技能）
- ・ 〈語り手〉が語る内容から、その特徴を考えている。（思考・判断・表現）



る必要があると考えられる。

3点目は、〈語り手〉が姿を見せないことについてである。2名だけが記述していた。しかし「天の声ができる」という記述であったため、〈語り手〉は常に姿を見せないということを認識できているかどうかは不確かであった。

他の児童が発表した内容を理解して自分のワークシートに書いている児童もいたが、全体を通して全ての児童がワークシートに何かしら自分の考えを記入し〈語り手〉について考える姿勢を見せていた。また、1点目の〈語り手〉が語る内容にほとんどの児童の記述が集約されたことから、児童は〈語り手〉が何を語っているのかによく注目していたといえる。

次に、授業の終わりに記入させた児童の授業の感想についてである。授業自体についての感想と、〈語り手〉の特徴について書かれた感想に分かれた。授業自体の感想については「分かりやすく楽しかった」「説明がわかりやすくよかった」「楽しい40分間になった」と10名の児童が記述した。「今まで勉強したことのないことを勉強して、むずかしかった」と記述した児童も1名いたが、〈語り手〉の特徴について書かれた感想も合わせると、学級全体で〈語り手〉を認識できた児童の割合は多いとわかる。

〈語り手〉についての感想では、〈語り手〉の役割の大切さについて述べていた児童が3名いたことを取り上げたい。「語り手はあまり目立たないけどいろいろなことができるすごく大事な役割だと思いました」「語り手の大切さに気づいた」「語り手がいなかったら登場人物の一人一人の心の中の気持ちが分からないから重要だと今日の授業で分かりました」という記述があった。〈語り手〉が文学的な文章を読む上で大切であることを理解していると捉えられる。これから本格的に〈語り手〉について考えていく段階として、期待がもてるのではないだろうか。

しかし、今後の学習に繋げる上で懸念点のある記述もあった。今回の実践では、あえて〈語り手〉を存在する人であるナレーターと置き換えることで説明を行った。すると感想にて、「ごんぎつねの語り手は場面のしめや場面変わりどころ(マ)をたくさんよんで大変だと思った」「語り手の方が登場人物(登場人物の誤字だと思われる)よりしゃべっていた」という記述があった。〈語り手〉を認識する上での指導効果があったと考えることができる。しかし、〈語り手〉という抽象的な役割を実際の登場人物のうちの人だと考えるのは、正確には〈語り手〉の概念とは言い難い。今後中学校で具体的に〈語り手〉について学ぶ中で、実体的ではない抽象的なものとして理解するための機会を提供する必要があるであろう。

#### 4. 大学での遠隔観察の様子

本節では、大学での学生の遠隔授業観察について述べる。実践を実施する教室にて、教師の近くでありかつ黒板全体が映る位置にタブレットを配置して大学にいる学生9名に対し授業の様子を配信した。児童の姿や児童のワークシートは映さず、教師の姿と黒板を映して配信した。配信そのものは問題なく行われた。教師や児童の声もはっきりと聞き取れたため、大学でも小学校現場の授業を観察し学生自身の学びへ生かすことができる可能性があるといえる。しかし、教師の指示や説明に対する児童の率直な反応を見ることができない点が課題として挙げられた。実際の小学校現場の教師から授業進行などを学べる点で遠隔の授業観察は有益だが、子どもの様子を観察できない点では不利益も生じることが明らかになった。

新型コロナウイルス感染症の拡大からも学生が教育現場に足を運ぶ機会は減っている。大学にいても現場のことを学べる機会の確保が必要だが、方法についてはさらに工夫できる点もあるだろう。

### V 成果と課題

本実践では、小学校6年生に対してアニメーション『ちびまる子ちゃん』を使って〈語り手〉を意識化させることを試みた。ナレーションが「まる子ちゃんの知らないことも知っている」という〈語り手〉と共通の性質を取り上げて説明を行ったところ、小学校6年生は文学的な文章に向き合い、〈語り手〉が人物の内面を含め、物語世界の様々なものについて語ることができることと理解した。さらに、一部の児童が〈語り手〉の大切さに気付いた。

したがって〈語り手〉の学習の入り口として、アニメーションを用いて〈語り手〉を認識するという本実践の方法は有効だといえるのではないだろうか。

その一方で本実践では、抽象的な役割であり登場人物には含まれない〈語り手〉を実体化して理解させることの問題が残った。今後の学習において〈語り手〉が1つの抽象的な役割であるという旨を学ぶことの必要性が課題となるだろう。〈語り手〉の概念には奥行きがあるため、子どもたちにはそれを段階的に学ばせることが必要であると考えられる。

### VI おわりに

本実践では小学校6年生が〈語り手〉を認識し、〈語り手〉が物語のあらゆる情報を語ることができることと学習した。〈語り手〉は一度で説明できる概念ではなく、また一度で理解できる概念でもない。この特徴をスタート地点とし、今後様々な特徴や性質に踏み込んで段階的に学ぶことが期待される。

最後になったが、本研究を進めるにあたり、授業実践にて多大な協力をいただいた小学校の方々に、深く謝意を表したい。

[注]

- <sup>1</sup>教育出版、光村図書、東京書籍、三省堂の4社を指す。
- <sup>2</sup>武田裕司「語り手」に着目して文学的文章を読むことの意義—小・中学生の「蜘蛛の糸」に対する反応分析を通して—『日本教科教育学会誌』（日本教科教育学会、2016年12月、第39巻第3号、51-62頁）
- <sup>3</sup>中山卓・伊藤和人・益子祥直・佐藤多佳子「小学校中学年における「語り」概念の獲得を目指した授業デザイン」『上越教育大学教職大学院研究紀要』（上越教育大学、2020年2月、第7巻、117-125頁）
- <sup>4</sup>ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』（水声社、1985年）
- <sup>5</sup>土田知則・青柳悦子・伊藤直哉『現代文学理論』（新曜社、1996年）
- <sup>6</sup>諏訪裕『ナラトロジーの理論と実践』（近代文芸社、2007年）
- <sup>7</sup>前掲『ナラトロジーの理論と実践』167頁
- <sup>8</sup>前掲『現代文学理論』55頁
- <sup>9</sup>前掲『現代文学理論』55頁
- <sup>10</sup>原作・脚本さくらももこ、監督須田裕美子「まる子、はじめての美容室」（DVD『ちびまる子ちゃんスペシャル「まる子、フォークコンサートへ行く」の巻』ポニーキャニオン、2011年）を使用した。
- <sup>11</sup>「ごんぎつね」の本文については、千葉俊二『新美南吉童話集』（岩波文庫、1996年、21-22頁）を使用した。漢字表記を適宜ひらがなに直すなどの変更を加えている。